38
光村
小国110

垣内松三著

# 日あたり

しんこくご 一ねん 下

教育學部
資料室

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449799

文部省検定済教科書

小KC
Mi65

60262
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449799

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449799

昭和二十四年十月十日
文部省検定済
小学校国語科用

# 日あたり

しんこくご　一ねん　下

広島大学図書
0130449799

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

## 指導者のために

(一) この本は上巻の学校生活、中巻の戸外生活につづいて、児童の家庭生活に取材の重点をおいた。上巻中巻と同じ人物を配し、児童の言語の発達段階にそって国語学習に於ける諸作業が、「読み」の発達を中心に有機的に行われるように留意した。

(二) この本の内容は、季節的な生活の変化に応じて、次の六つの主題に統一してある。

一、日あたり（十二月）
初冬の家庭での遊び、手つだい等に取材して、童謡・童詩・対話・作文等を提出した。

二、あかるいあさ（十二月）
一の後を受けて、冬季に入つての自然、家庭での仕事、新年を迎える心がまえを主題として各種の文を採用した。

三、こよみ（一月）
正月の生活を中心に、カレンダーを作ったり、かるたをしらえたり、えにっきをかいたりする作業を通じて言語能力を高めることにした。

四、たこ（一月・二月）
えにっきの後を受け、たこを主題とする「かみしばい」の形式をとって、長い文を読ませることにした。「かみしばい」の作業によって、興味のうちに言語能力の向上を期待したい。

五、たのしいよる（二月）
夜の家庭生活に取材し、手紙・笑話・なぞ・いいにくいことば・寓話・物語・伝説を提出した。

六、あたたかい風（三月）
早春の自然・生活に取材し、詩・言語連想・長文童話・よびかけ等を提出した。一年生最後の国語学習として、二年になるという明るい希望と喜びをもって豊かな言語活動をさせたい。

(三) この本に提出した新語は、三一五語で、毎頁新語率は三・八〇語になるが、（たとえば「赤」（名詞）と「赤い」（形容詞）とを二語に区別しているからで）実際には二語又は三語にとどめてある。総用語数二五〇二語、単位語数五四〇語であるから、一語平均反復回数は四・六二回である。

(四) この本でも、さし絵は重要な位置をしめるから指導上充分留意してほしい。

(五) この本の使用期間は十二月から三月までを目標として組織的に編集してあるから、地方の実情に即し、児童の個人差を考えて有効適切に使用されたい。

もくろく


一　日あたり……4
(一)えんがわ
(二)おきゃくあそび
(三)にわのそうじ

二　あかるい　あさ……12
(一)とおくの山
(二)ゆきのあさ
(三)もちもの

三　こよみ……20
(一)こよみ
(二)えにっき

四　たこ……26

五　たのしいよる……39
(一)てがみ
(二)たんじょう日
(三)たのしいよる
(四)しゃしん

六　あたたかい風……62
(一)春のことば
(二)あたたかい風
(三)さよなら一年生



広島大学図書
0130449799

# 一　日あたり

## (一)　えんがわ

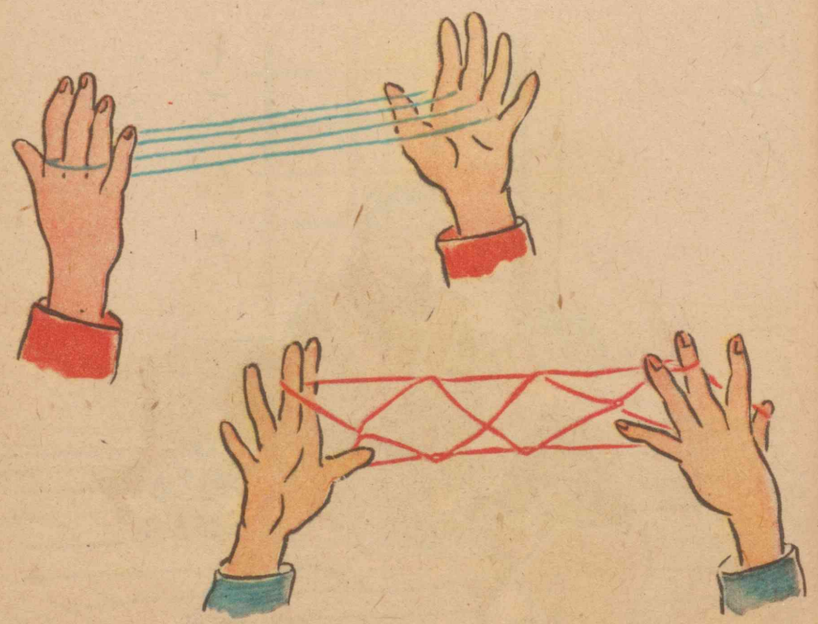
えんがわ　日あたり、
あやとり　してる。

青い　けいとが、
ちらちら　うごく。
青い　川です、

おやゆび、子ゆび。

赤い　はしです、
左手、右手。
赤い　けいとが、
ちらちら　うごく。

えんがわ　日あたり、
子どもが　ふたり。

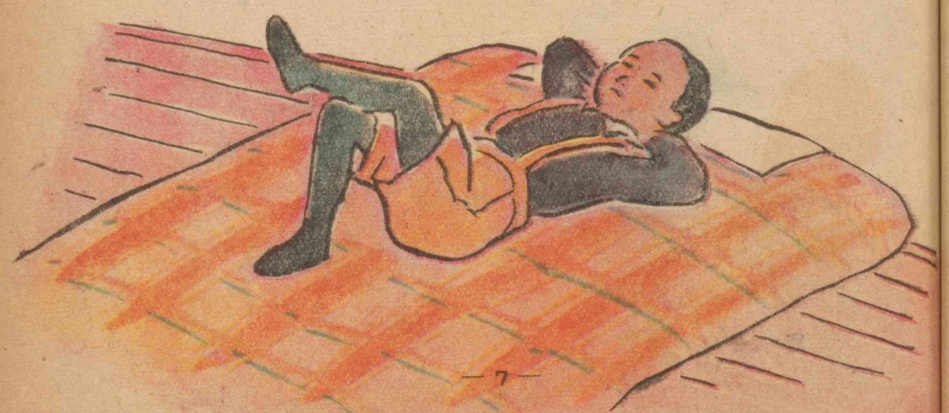


○

えんがわに、ねこが　ねて　いた。
おばあさんが、あみものを　して　いた。
「なにを　あんで　いるの。」
「手ぶくろだよ。」
「だれの　手ぶくろ。」
「さあ、――。」
おばあさんは、
ぼくを　みて　にっこり　なさった。

○

えんがわに、
ふとんが　ほして　ある。
ふっくらと　ふくれて　いる。
ねころんで　空を　みた。
白い　くもが、
ながれて　いた。
目を　つぶっても、
くもが　みえるようだ。



## （二）　おきゃくあそび

れいこ「ごめんください。」

みどり「はい、どなたですか。」

れいこ「れいこです、あそびに　きました。」

みどり「よく　おいでに　なりました。おあがりください。」

まさお「こん　こん　こん。」

よしこ「あら、きつねさんですか。」

まさお「ちがうよ。これは　とを　たたく　音。」

よしこ「あ、そうですか。どなたですか。」

まさお「まさおです。」

よしこ「どうぞ　おはいりください。」

まさお「こんにちは。あそびに　きました。」

よしこ「よく　いらっしゃいました。れいこさんも　おみえに　なって　います。」

## (三) にわの そうじ

いい てんきでした。

おとうさんと おかあさんが、にわの そうじを して いらっしゃいました。ぼくも てつだいました。

おちばや かれくさの 山が できました。おとうさんが 火を おつけに なり ました。ぱちぱち。

と もえました。

「もえる、もえる。」

れいこが よろこびました。

けむりが、そこらじゅうに ひろがりました。

「さあ、これを いれて あげましょう。」

おかあさんが、さつまいもを、火の 中に いれて くださいました。火に あたりながら、いもの やけ るのを まちました。

## 二　あかるい　あさ

### (一)　とおくの　山

あかるい　しょうじに、
木の　かげが、
うつって　いる。
ちょん　ちょんと、
すずめの　かげが
うごいた。

○

とおくの　山に、
ゆきが　ふったよ。

白く、
ひかって　いるよ。

あの　山から、
冬が　くるのだね。

## (二) ゆきの あさ

にわにも、みちにも、やねにも、木の えだにも、まっ白な ゆきが、つもって いました。

おじいさんが、みちの ゆきかきを して いらっしゃいました。

まさおさんも、ゆきかきの てつだいを しました。

「おとなりの みちも つけて あげましょう。」と、まさおさんが いいました。

おじいさんは にこにこして、

「それは いい。つけて あげよう。」と おっしゃいました。

ゆきの　上に、だれ〃
かの　足あとが　あり〃
ました。
足あとは、いえから
いえへ　つづいて　い〃
ました。
「しんぶんやさんだな。」
と、まさおさんは　お〃
もいました。

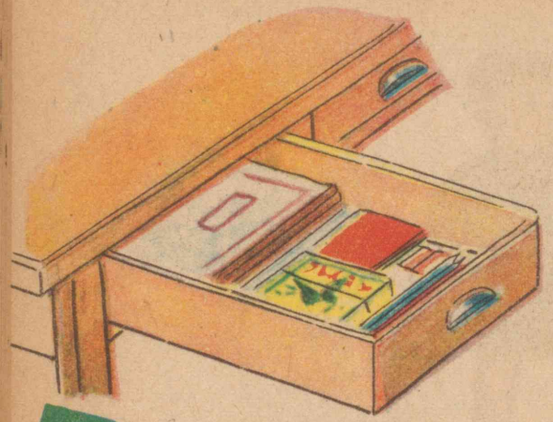
くろが　よろこんで、そこ〃
らじゅうを　かけまわりまし〃
た。
よしこさんも、おかあさん〃
と　ゆきかきを　して　いま〃
した。
「おはよう。」
「おはよう。」
いきが　白く　みえました。

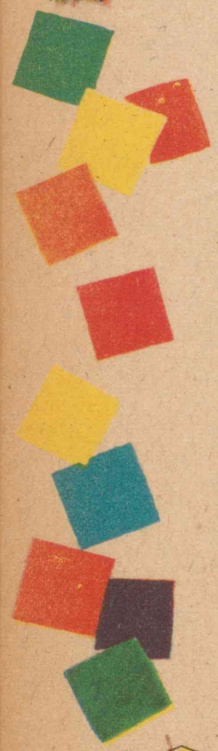
## (三)　もちもの

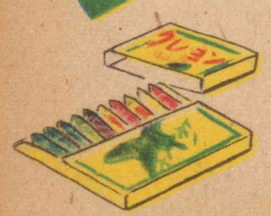
よしこさんは、もちものを　かたずけました。
がっこうの　本と、ほかの
本とを、べつに　して　ならべました。
おはなしの　本が　五さつに　なりました。
つくえの　中も、かたずけ

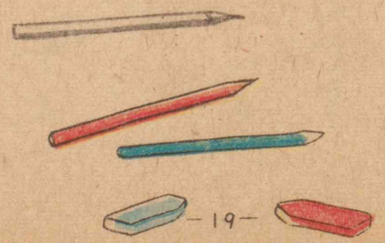
ました。
ふるい　ちょうめんの　上に、あたらしい　ちょうめんを　かさねました。ぜんぶで、六さつです。

えんぴつ　三本、
けしごむ　ふたつ、
くれよん　ひとはこ、
いろがみ　十まい。









## 三　こよみ

### (一)　こよみ

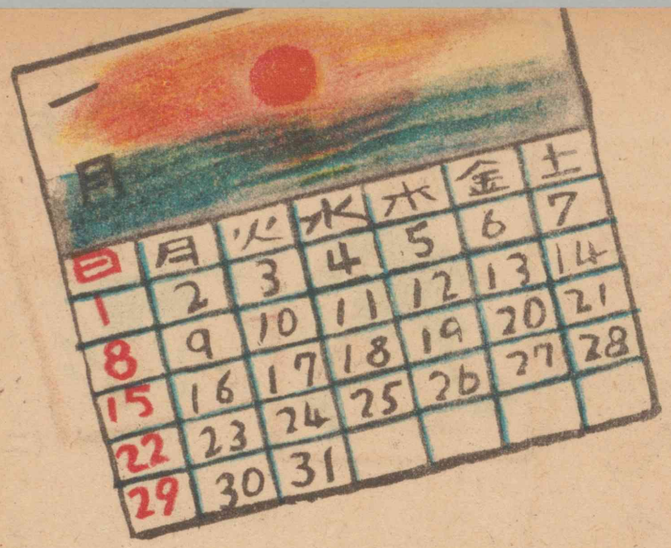
○

「さあ、めくりますよ。」

といって、まさおさんは、こよみの　おもての　かみを、めくりました。

1が　でました。お正月に　なって、うれしいと　おもいました。






○

一月の　こよみを　つくりました。

上に　よう日を　かきました。

その　下に、1、2、3、——と、日を　かきました。

上の　ほうに、うみから　でた　あさ日の　えを　かきました。

## (二) えにっき

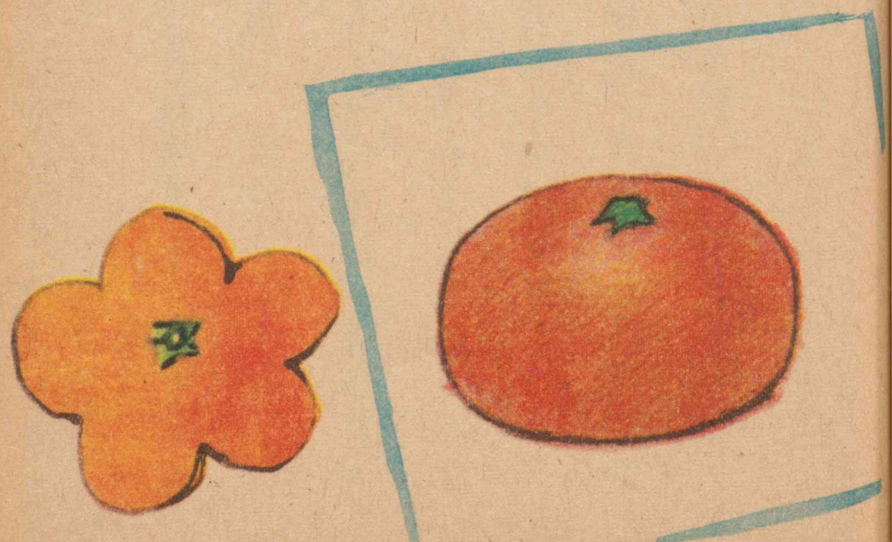
○

かるたとりを して あ〃
そびました。
あ—あかるい あさ。
い—いつも げんき。
う—うれしい お正月。
え—えんがわで あやとり。
お—おにわの かげふみ。



○

おかあさんから、みかん〃を いただきました。
みかんの えを かきました。
赤と き色を まぜて かきました。
みかんの かわで うめ〃の はなを、つくりました。



○

ゆきだるまを　つくりました。

おとうさんに、てつだって　もらいました。

目を　つけました。

口を　つけました。

くろが、ふしぎそうに　みて　いました。

○

たこを　あげました。

ひさしさんと　ふたりで　あげました。

くるくると　まわるので　おを　ながく　しました。

よく　あがりました。

ぶんぶんと　うなって、

空高く　あがりました。

# 四　たこ

これは　かみしばいです。みなさんも　えを　かいて　みて　くだ〃さい。

（一）

まさおさんの　たこには、赤い　だるまさんの　えが、かいて　あ〃りました。

つよく　糸を　ひくと、だるま〃さんは、高く　あがって　いき〃



した。

ひさしさんの　やっこだこが、下の方で　みあげて　いました。

（二）

だるまさんの　たこは、もっと　高く　あがりた〃いと　おもいました。まさおさんが　糸〃を　ひいた　とき、かぜを　けって　あ〃がろうと　しました。

からだが　ぐらっと　ゆれました。糸〃

が　きれたのです。

たこは　くるくる　まわりながら、かぜに　とばされて　いきました。おいかけて　くる　まさおさんが、ちらっと　みえました。

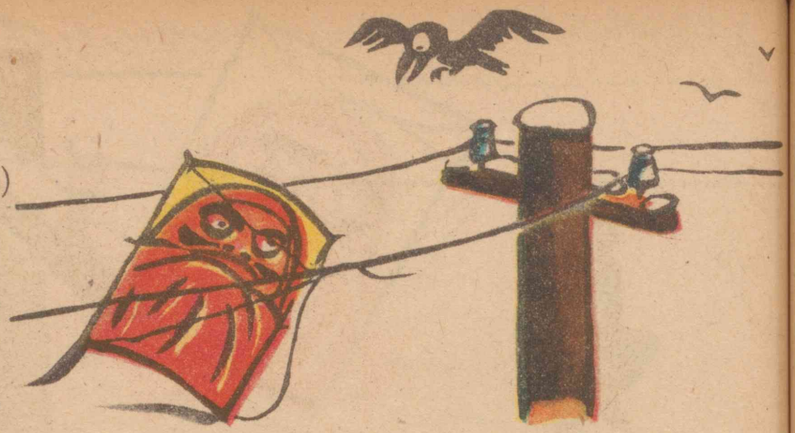
それから　さきは、わかりませんでした。

(三)「かあ　かあ　かあ。」

からすさんに　よばれて、きが　つきました。

でんせんに　ひっかかって　いたのです。





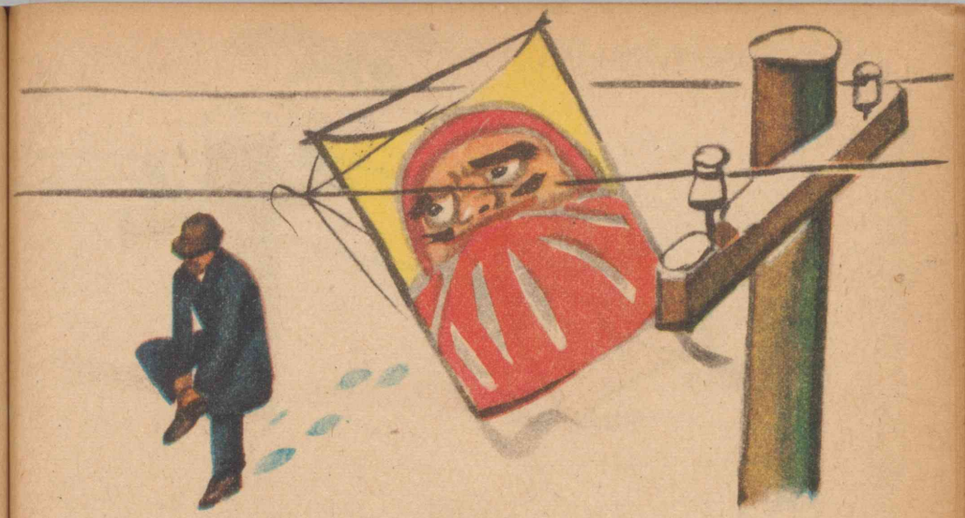
「しっかり　つかまって　いないと、やぶれて　しまうよ。」

からすさんが　しんせつに　いって　くれました。そして、

「かあ　かあ。」

と　なきながら、夕ぐれの　空を　とんで　いきました。

(四)　月が　でました。つめたい　かぜが　ゆきの　上



を　ふいて　います。
たこは、でんせんに　つかまって
ふるえて　いました。
むこうから、まさおさんの　おと
うさんが　やって　きました。
たこは　うれしく　なって、でん
せんを　ばたばた　たたきました。
おとうさんは、ちょっと　立ちど
まりましたが、くつの　ひもを　な



おすと、さっさと　いって　しまいました。
たこは　あわてて、おとうさんを　よびとめようと、
からだを　ばたばた　させました。すると、まきつい
て　いた　糸が　きれて、でんせんから　はなれて
しまいました。

（五）　だるまさんの　たこは、ゆきの　上に　なげつけ
られました。そこは、うまやの　前でした。
うまやでは、子うまが　さむそうに、ぽこぽこと

じめんを　けって　いました。

「さあ、早く　おやすみ。」

おかあさんの　うまの

声が　しました。

子うまは　ねむったの

でしょうか、音を　させ

なく　なりました。

たこは　ひとりで　ふるえて　いました。

月が、しずかに　みて　いました。

(六)　あさに　なりました。

とけた　ゆきが、ぽたりと　おちました。だるまさ

んの　目が　ぬれました。だるまさんは、ないて　い

るような　かおに　なりました。

男の　子が、でて　きました。たこは　うれしく

なりました。

「おや、こんな　ところに　たこが、――。」

男の　子は、たこを　ひろって　みて　いましたが、

もって　いって、かきねの　外に　すてました。

(七) だるまさんの たこは、目を
むいたまま、空を みあげて いました。もう一ど、青い 空を
とんで みたいと おもいました。
夕がた、一ぴきの いぬが きました。たこの 糸に じゃれつきはじめました。
糸を くわえて ひいたので、
たこは ふわりと うかびあがり

ました。いぬは びっくりして ほえました。

(八) たこは、さむい かぜに ふかれて、おきたり
ころんだり して いきました。
日が くれました。町に あかりが
つきました。
たこは、あかりの ついた まどに
ふきつけられました。
へやの 中を みると、やっこだこ

が　ねて　います。

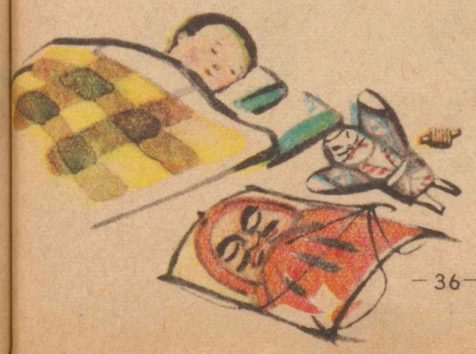
「おや、ひさしさんの　たこだ。」

(九)　だるまさんは　うれしくて　たまりません。まど
を　ばたばた　たたきました。

「だあれ。」

ひさしさんの　おかあさんが　かお
を　だしました。

「あら、こんな　ところに　たこが、――。」





と　いって、たこを　手に　とりました。

「おや、まさおさんの　たこだよ、おかあさん。」

ひさしさんが、でて　きて　いいました。

「そう、こんなに　やぶれて、――。」

おかあさんは、だるまさんを　なでて　くれました。

「あした、もって　いって　あげよう。」

と、ひさしさんが　いいました。

そのばん　だるまさんの　たこは、やっこだこと
ならんで　ねました。

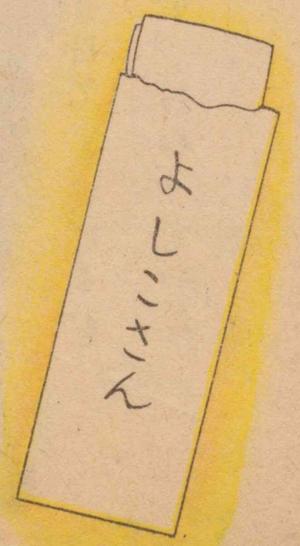
(十)　つぎの日、ふたつの　たこが
空に　あがって　いました。
だるまさんの　やぶれた　ところ"
には、まさおさんが　かみを　はっ"
て、色を　ぬって　くれました。
だるまさんの　たこと　やっこだ"
こは、かたを　ならべて　なかよく
あがって　いました。
よく　はれた、青い　空でした。



五　たのしい　よる

(一)　てがみ

「よしこさん、てがみですよ。」
と、おかあさんが　おっしゃって、小さな　ふうとう"
を　くださいました。
「ゆうびんうけに　はいって　いましたよ。かわいい
てがみですね。」
と　おっしゃいました。



ふうとうには、「よしこさん」と　かいて　ありました。
まさおさんが　かいた　てがみでした。
まさおさんが　もって　きて、ゆうびんうけに　いれて　いったのでしょう。

「よしこさん。
あさっては　ぼくの　たんじょう日です。どうぞ
あそびに　きて　ください。学校が　おわってから
きて　ください。



ひさしさんも　みどりさんも　きます。おもしろい
ことを　して　あそびましょう。　まさお。」

つぎの　日に、まさお
さんの　ゆうびんうけに、
かわいい　てがみが　はいって　いました。

○

「おてがみ　ありがとう　ございました。おたんじょ

う日、おめでとう　ございます。
きっと　まいります。　よしこ」。

○

「まさおさん、おめでとう。きっと　いきますよ。早く　あしたに　なれば　いいと　おもいます。ひさし」。

○

「ありがとう　ございます。わたくしは、はじめてがみを　もらいました。
あしたが　たのしみです。　みどり」。



## (二)　たんじょう日

きょうは、まさおさんの
たんじょう日です。
火ばちに　あたりながら、
おはなしを　して　あそび
ました。

○

みどりさんの　した　わらいばなし。

「とみこさんが、目を つぶって
かがみを みて いました。
『あなたは、なぜ 目を つぶって
て かがみを みて いるの。』
と いいますと、とみこさんは、
『ねむって いる ときの、わたし
しの かおが みたいからよ。』
と いいました。」

○



まさおさんの だした かんがえもの。

「上が あって、下が ない もの なあに。」

「下が あって、上が ない もの なあに。」

「立てば ひくく なり、すわれば 高く なる もの なあに。」

「けずれば けずるほど、大きく なる もの なあに。」

○

よしこさんの　だした　いいにくい　ことば。
「みなさん、早く　いって　ごらんなさい。
なまむぎ　なまごめ　なまたまご」。

○

ひさしさんの　した　おはなし。
「一ぴきの　いぬが、にくを　くわえて、はしの　上に　きました。
下を　みると、にくを　くわえた　いぬが　います。
いぬは、じぶんの　かげが、川に　うつって　いる」



のだとは　きが　つきません。
よくばりの　いぬは、その
にくも　ほしく　なりました。
じぶんが　にくを　くわえ
て　いるのを　わすれて、
『わん。』
と　ほえました。
にくが、川に　おちて　し
まいました」。

○

それから、四にんで、「三びきの　子ぐま」の　おはな
しを　つづける　ことに　なりました。

ひさし「三びきの　子ぐまは、山を　のぼって　いきました。小さい　子ぐまも、なくのを　やめて、のぼって　いきました。」

よしこ「ときどき、『おかあさん』と　よんで　みました。『おとうさん』と　よんで　みました。」

みどり「子ぐまたちの　声は、とおくに　ひびきました。



山びこに　なって　かえって
きました。

子ぐまたちは、それを　おかあさんの　声かと　おもいました。おとうさんの　声かと　おもいました。」

まさお「山を　のぼって　いくと、むこうの　方で、がさっと　音が　しました。三びきの　子ぐまは、はっとして、立ちどまりました。」

## (三) たのしい よる

外は ゆきでした。
しずかな よるでした。
みんな こたつに あ"
たって いました。
「ふみおちゃん。『つんつ
ん 月よだ。』を おどっ"
てごらん。」

と、ねえさんが いいま"
した。
ふみおさんは、おかあ"
さんの ひざの 上で、
「ぽんぽこ ぽんの ぽ"
ん。」
と うたって、おなかを たたきました。
おかしいので みんなが わらうと、ふみおさんも
わらうので、また 大わらいに なりました。

その　うちに、ふみおさんは　ねむく　なりました。
おかあさんが、ふとんに　ねかせました。
いもうとが、
「おじいさん。『ころころざか』の　おはなしを　して
ちょうだい。」
と　いいだしました。まさおさんも、
「して　ちょうだい。」
と　いいました。おじいさんは、
「また『ころころざか』かね。」



と　わらいながら、おはなしを　はじめました。

○

むかし、さかの　上に、げんべえさんと　いう　お
じいさんが　すんで　いました。
ある日、げんべえさんは、あひるの　たまごを、や
いて　たべようと　おもいました。
わらばいに　入れたと　おもうと、たまごは　ぽん
と　とびだしました。そして、ころころと　ころがり
だしました。

げんべえさんは、それを　つかまえようと　しました。



た。たまごは、げんべえさんの　手を　するりと　ぬけて、ころがって　いきました。

げんべえさんは、たまごを　おいかけました。たまごは、さか道を　ころころ　ころがって　いきました。めんどりが　とびだして　きました。くちばしで　おさえようと　しました。

たまごは、するりと　ころがって　いきました。めんどりが　おいかけました。

うまが　でて　きました。うまは　前あしで　たま

ごを　おさえようと　しました。
たまごは、するりと　ころがって　いきました。う゛
まも　おいかけました。
いぬが　でて　きました。いぬは　口を　あけて、
たまごに　とびつきました。
たまごは、するりと　にげました。いぬも　おいか゛
けて　いきました。
さかの　下の　方から、おすもうさんが　のぼって
きました。



「その　たまごを　おさえてくれ。」
と、みんなが　さけびました。
「よし。」
おすもうさんは、すもうを
とるときのような　かっこう゛
を　して、たまごを　おさえようと　しました。
たまごは、するりと　またの　下を　とおりぬけて
しまいました。
おすもうさんも　あわてて、たまごを　おいかけま゛

した。

さかの　下は　川に　なって　いました。

たまごは　ころころと　ころがって　いって、

とぷんと　川に　とびこみました。

川の　そばに　大きな　石が　ありました。

おすもうさんが　石に　つまずいて　ころびました。

いぬが　ころびました。



うまが　ころびました。

めんどりが　ころびました。

げんべえさんが　ころびました。

みんなが　かおを　あげて

みると、あひるの　ひよこが、

すいすいと　水の　上を　およいで　いました。

それから、その　さか道を「ころころざか」と

よぶように　なりました。

## (四) しゃしん

まさおさんが、ねえさんと しゃしんちょうを みて いました。

「おとうさんが、やきゅうを して いる ところね。」

と、まさおさんが いいました。

「これは、おかあさんが およめさんに きた ときの しゃしんでしょう。」

と、ねえさんが いいました。



「まるはだかの あかちゃんは ぼくでしょう。」

「こっちの あかちゃんは わたしね。」

ふたりは、かおを みあわせて わらいました。

「これは、おばあさんの わかい ときの しゃしんでしょう。ひざの 上の あかちゃんは だれかしら。」

と はなして いると、おばあさんが、

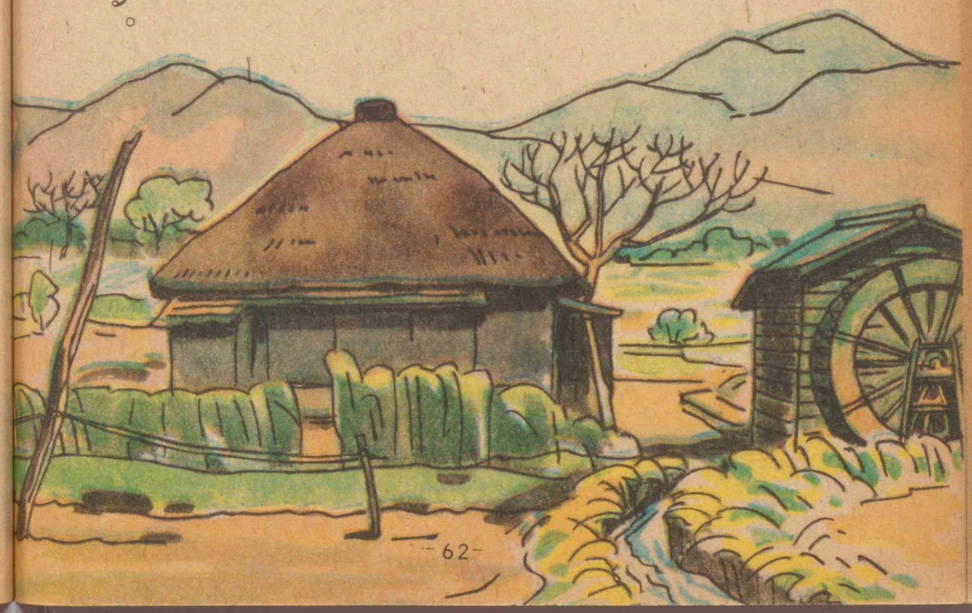
「おまえたちの おとうさんだよ。」

と いわれたので、ふきだして しまいました。

## 六　あたたかい　風

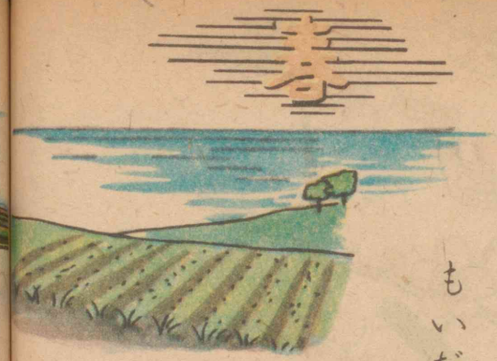
### (一)　春の　ことば

水を　はね、はね、
すいしゃが　まわる。
ごっとん、ごっとん、春だ。
春が　きた。
お山の　ゆきが　とけて　くる。



ごっとん、ごっとん、とけて　くる。

どこかで、
うぐいす　ないて　いる。
「ほう、ほう、春だ。
ほう　ほけきょ。
けきょ、けきょ。
うめの　花が　さく」。



○

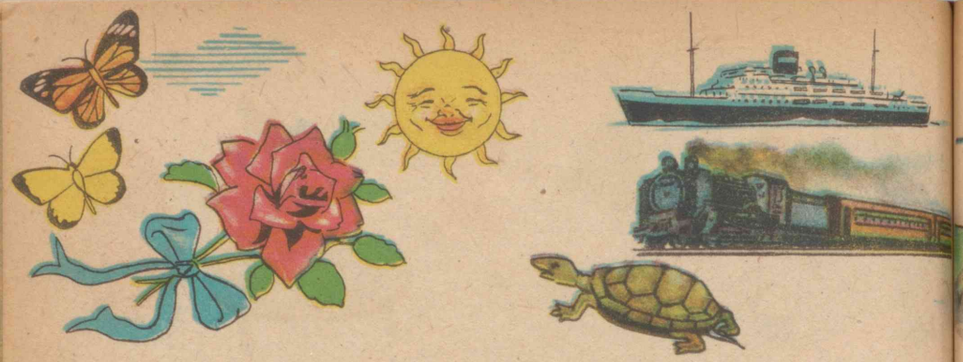
先生が、こくばんに「春」と　いう　字を　おかきに
なりました。

「春と　いう　字を　よんで、つぎから　つぎへ　お
もいだす　ことばを、どんどん　かいて　ごらん。」
と　おっしゃいました。

ひさしさんの　かいた　ことば。

「春――むぎばたけ――ひろい――うみ





――きせん――きしゃ――早い――お
そい――かめ。」

よしこさんの　かいた　ことば。

「春――あたたかい――お日さま――空
――青い――赤い――花――ちょうち
ょ――りぼん。」

まさおさんの　かいた　ことば。

「春――風――たこ――だるま――ロ――
――ごはん――おかあさん――えぷろん
――白。」

みどりさんの　かいた　ことば。

「春――はらっぱ――あそぶ――なわとび――はねる――うさぎ――月――かげふみ――ともだち――学校――二年生。」

(二)　あたたかい　風

あたたかい　風の　おや子が、
空を　とおって　いました。
はたけには、むぎが　みどり
のれつを　つくって　いました。
「まあ、きれいな　はたけ」
と、風の　子は　いいました。

「きれいですね。おりて いって、むぎを なでて
やりましょう。」
と、おかあさんの 風が
いいました。
風の おや子は、ふわふ
わと まいおりて、むぎを
なでて やりました。むぎ
は、
「ありがとう、ありがとう。」

と いって、みどりいろの 手を ふりました。
はたけの 中に、一本の 木が はえ
て いました。
「おかあさん、あの 木も なでて あ
げましょう。」
「ええ、なでて あげましょう。」
風の おや子は、木の えだを やさ
しく なでて やりました。
木も うれしそうに にこにこ しま

した。

そして、うすい　みどりの　めを　だしました。

風の　おや子は、だんだん　北の　国に　やって

きました。

「おかあさん、あんな　ところに、まだ　ゆきが　あ

りますよ」。

子どもの　風が　いいました。

「ええ、子どもたちが　あそんで　いますね。おりて

いって、もっと　ゆきを　けして　あげましょう」。



おかあさんの　風が　いいました。

まさおさんの　うちの

うらにわには、まだ、ゆき

が　すこし　のこって　い

ました。

ゆきの　きえた　ところ

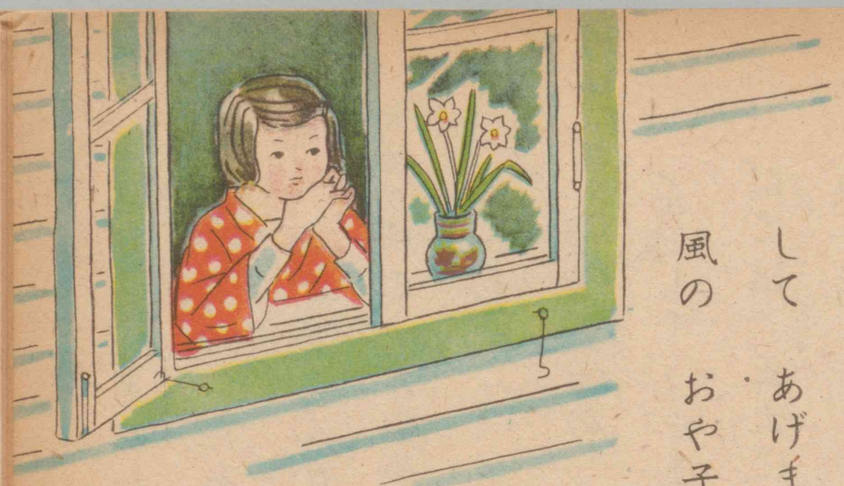
で、まさおさんと　ひさしさんが、こまを　まわして

あそんでいる　ところでした。

風の　おや子は、ふわふわと　おりて　いって、そ

こらじゅうを　やさしく　ふいて　やりました。
ゆきが　どんどん　とけだしました。
「あたたかい　風だね。」
と、まさおさんが　いいました。
「春の　風だね。」
と、ひさしさんが　いいました。
びょういんの　まどで、青い　かおを　した　女の子が、外を　ながめて　いました。
「おかあさん。あの子、かわいそうですね。」





「ええ、あの子も　なでて　あげましょう。げんきに　して　あげましょう。」
風の　おや子は、びょういんの　まどに　きました。
女の　子の　かおを、そっと　なで　て　やりました。
女の　子は、まぶしそうに　外を　ながめて　いました。
女の　子の　おかあさんが、まどの　ところに　でて　きました。

「まあ、あたたかい　風ですね。あなたも、もう　すこし　したら　よく　なりますよ。」

おかあさんが　やさしく　いって　いました。

風の　おや子は　学校に　きました。

日よう日の　学校は　がらんと　して　いました。うんどうばでは、五六にんの　子どもが　あそんで　いました。

みどりさんと　よしこさんが、ぶらんこに　のって　あそんで　いました。

風の　おや子は、ふたりを　なでて　あげました。

「まあ、きもちの　いい　風。」

と、みどりさんが　いいました。

「あたたかい　風。」

と、よしこさんが　いいました。

風の　おや子は、うんどうばに

のこって　いる　ゆきを、けして　やろうと　おもい　ました。

風の　おや子は、そこらじゅうを　ふきました。うんどうばの　ゆきは　どんどん　とけはじめました。

「これで、あしたから　子どもたちが　げんきに　あそべますね。」

風の　おや子は、はなしあいながら、また、北の空に　むかって　とびつづけて　いきました。



## (三)　さよなら　一年生

1

まさお「さよなら。」

みどり「さよなら。」

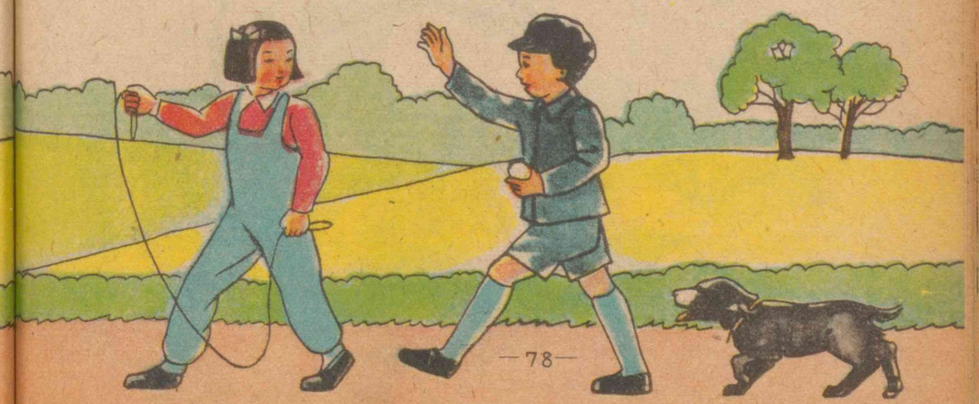
ひさし「一年生。」

まさお「ぼくは、もうすぐ　二年生。」

よしこ「わたしも、もうすぐ　二年生。」

みんな「みんな　うれしい　二年生。」

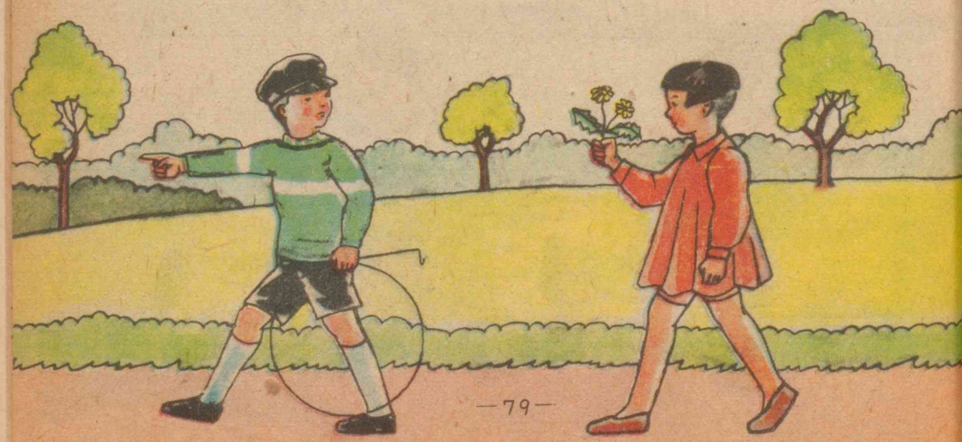
まさお「一年生に　なった　ころ、
さくらの　花が　さいて　いた。」
ひさし「南の　風が　ふいて　いた。」
よしこ「ことしも　さくらの　花が　さく。」
みどり「ことしも　春の　風が　ふく。」
まさお「そして、みんなは　二年生。」
よしこ「うれしい、うれしい、二年生。」
みんな「さよなら、さよなら、
一年生。」





## 2

みどり「あかるい　青空。」
みんな「あ　い　う　え　お。」
まさお「かけて　こい　こい。」
みんな「か　き　く　け　こ。」
よしこ「そろって　いきます。」
みんな「さ　し　す　せ　そ。」
ひさし「たのしい　友だち。」

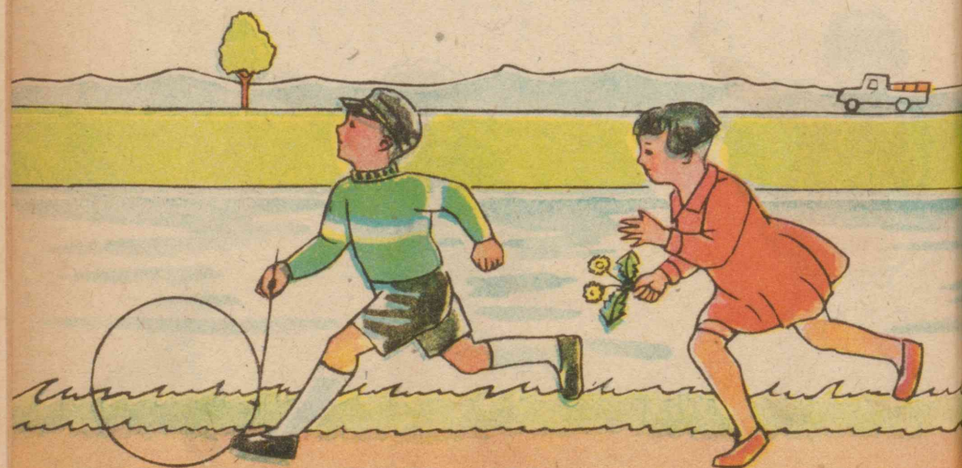


みんな「たちつてと。」
みどり「みんな　二年に。」
みんな「なにぬねの。」
男の子「さよなら。」
女の子「さよなら。」
みんな「一年生。」

## 3

まさお「はらっぱ　日あたり。」

みんな「はひふへほ。」
よしこ「みどりの　めも　出た。」
みんな「まみむめも。」
ひさし「いよいよ　二年に。」
みんな「やいゆえよ。」
みどり「ららん　らんらん。」
みんな「らりるれろ。」
まさお「うれしい　おわかれ。」
みんな「わゐうゑを。」



よしこ「さよなら。
まさお「さよなら。」
みんな「一年生。」
みどり「みんな、もうすぐ　二年生。」
みんな「みんな、もうすぐ　二年生。」

# がくしゅうの　手びき

この　本には、うちの　中でした　あそび、しごと、おはなしなどが、おもに　かいて　あります。

ふゆから　はるに　かけての　あなたの　せいかつと　くらべながら、おはなしをしたり、よんだり、かいたり、ぶんを　つくったり、かみしばいを　かいたりして、しっかりと　べんきょうして　ください。

一　日あたり

あなたも、日あたりで　なかよく　げんきに　あそぶでしょう。なにをして　あそびますか。

(一)　えんがわ

日あたりの　えんがわで、あやとりを　したときの　ことを　うたに　かいたものです。

あんしょう　しましょう。

おばあさんが　あんでいる　手ぶくろは　だれのでしょう。そのつぎも　みじかい　ぶんです。　あなたも　みじかい　ぶんを　かいて　ください。

(二)　おきゃくあそび

れいこや　みどりに　なる人を　きめて、よんで　ください。あなたも　おきゃくあそびを　して　ごらんなさい。

ただしい　ことばで　おはなしを　しましょう。

(三)　ままごとや　がっこうごっこも　して　あそびましょう。

にわの　そうじ

しごとの　手つだいを　したことを、みんなで　はなしあいましょう。

二　あかるい　あさ

(一)　正月が　ちかずいた　ふゆの　あさの　ことです。

とおくの　山

みじかい　ぶんが　ふたつです。

よく　きを　つけて　ふゆの　あさの　ことを　みて　います。

かんじたことを　そのまま　かいて　います。

(二)　あなたも　みじかい　ぶんを　かいて　ください。

ゆきのあさ

まさおさんは　ゆきの　あさに　どんな　ことを　しましたか。まさおさんは　よく　きを　つけて　ものを　みて　います。それは　どんな　ことですか。

(三)　もちもの

正月が　きます。あなたも　もちものを　かたずけましょう。あなたの　もちものを　かきだして　ください。

えんぴつは　一本、二本と　かぞえます。かみは　一まい　二まいと　かぞえます。人は、いぬは、とりは、なんと　いって　かぞえますか。

三　こよみ

正月のあそびや、したことが　かいて　あります。あなたは、正月の　やすみに　なにをして　あそびましたか。

どんな　べんきょうを　しましたか。

(一)　こよみ

あなたも、こよみを　つくって　ごらんなさい。

(二)　えにっき

正月に　あそんだことを　えにっきに　かいて　みましょう。かるたも　じぶんで　つくって　みましょう。

四

たこ

これは　かみしばいです。この　ぶんを　よんで　おもしろいと　おもった　ところは　どこですか。

(一)(二)(三)……と　ばんごうが　つけて　あります。そのじゅんじょに　あなたも　えを　かいて　みて　ください。

本をみないで　この　おはなしを　して　みましょう。

五

(一)　たのしい　よる

てがみ

なんの　てがみですか。あなたは　てがみを　かいたことが　ありますか。あなたも　てがみを　かいて　みましょう。

(二)　たんじょう日

あなたの　たんじょう日は　いつですか。

わらいばなし、なぞ、いいにくいことば、おはなしごっこなどをして　みましょう。

「三びきの　子ぐま」は　どうなるでしょう。かんがえて　つづきを　つくって　ください。

(三)　たのしいよる

「ころころざか」の　おはなしは、どんな　ところが　おもしろいと　おもいましたか。あなたは　どんな　おはなしを　して　いますか。

(四)　しゃしん

あなたも、うちで　しゃしんを　みたときの　ことを　おはなしして　ください。

おとうさんの　おとうさんは　おじいさんです。おとうさんの　おかあさんは　どなた　ですか。

六

(一)　あたたかい　風

春の　ことば

はじめは　春の　うたです。すいしゃも　うぐいすも「春のことば」を　うたって　います。なんと　いって、うたって　いますか。まさおさんたちは「春」と　いう字から、おもった　ことを　どんどん　かきました。

あなたも　おもった　ことを　かいて　ください。

「学校」「おとうさん」などと　だいをきめて、おもった　ことを　つぎつぎに　かいて　みましょう。

(二)　あたたかい　風

かぜの　おや子は、どこへ　行って、どんなことを　しましたか。おはなしが　できるように　して　ください。

この　ぶんを　よんで、おもったことを　おはなし　して　ください。ぶんにかいて　みて　ください。

(三)　さようなら　一年生

これは　よびかけ　です。

大きく　口を　ひらいて、はっきりと　よみましょう。

よむ　人を　きめて、みんなで　よみあいましょう。

げんきに　たのしく　二年生に　なりましょう。



# あたらしい　ことば

一

日あたり　あさ日　夕ぐれ　夕がた

ゆき　山びこ　石　水

えだ、　め　いも　うめ

きつまいも　さくら　ちょうちょ　うぐいす

ぬんどり　うま　からす　すずめ

きつね　ひよこ　前あし　くちばし

お　かれくさ　火　けむり

じぬん　さか

地　蝿　ほか　べつ

ぜんぶ　おもて　外　そば

つぎ　そこらじゅう　さき　ころ

方　れつ　お正月　一月

冬　春　よう日　日よう日

たんじょう日　あした　あさって　あさ

よる　ばん　ことし　むかし

一年生　二年生

ゆび　口　かわ　からだ

かた　ひざ　おなか　また

まるはだか　なま　いき　声

色　足あと　くつ　手ぶくろ

もちもの　きもち　かわいそう　よくばり

たのしみ　しんせつ　しずか　ふしぎ

みかん　むぎ　こめ　たまご

にく　ごはん　えんがわ　しょうじ

と　いえ　うち　うまや

かきね　まど　へや　うらにわ

ゆうびんうけ　こくばん　つくえ　火ばち

こたつ　かがみ　わらばい　ふとん

え　えにっき　こよみ　たこ

やっこだこ　だるま　ゆきだるま　しゃしん

ふうとう　かみ　糸　けいと

ひも　なわとび　あやとり　あみもの

けいこ　おきゃくあそび　かるたとり　かみしばい

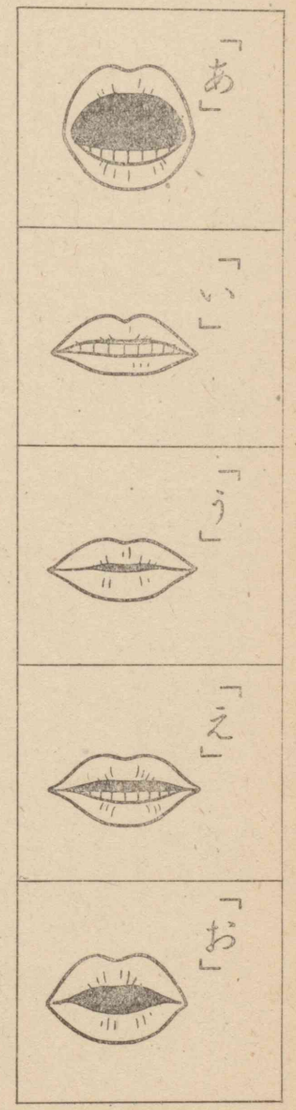
ゆきがき　そうじ　こま　いろがみ
くれよん　けしごむ　えんぴつ　ちょうめん
しゃしんちょう　本　あかり　おばあさん
おじいさん　ねえさん　いもうと　およめさん
おや　おや子　男　女
しんぶんやさん　おすもうさん　てがみ　やきゅう
すいしゃ　さかみち　はたけ　でんせん
びょういん　うんどうば　ともだち　字
ことば　わらいばなし　かんがえもの
じぶん　おまえたち　だれ(だあれ)　これ
どなた　なぜ　そこ　こっち
ひとつ(つ)　ふたつ　ひとり　ふたり
十　一さつ　一本　一はこ
二
できました　ちがう　たまりません　はいって

あたる　きれた　ぬけて　のこっている
あけて　はって　おわって　やめて
やける　やいて　もえました　けして
きえた　ぬれました　ひびきました　とけた
(はなが)さいて　はえて　けずる　ふくれている
ひろがりました　つもって　ふきつけられました　ほして
(そらが)はれた　うなって　ほえました　じゃれつく
くわえて
まいります　おいでになりました　やってきました　させました
なさった　みあげ　ながめて　おもいだす
きがつきました　わすれて　(目を)むいた(目を)つぶって
ふるえて　ふきだして　さけびました　よみます
(色を)ぬって　めくります　まぜて　あんで
すてました　なでて　おさえよう
もっていって　けって　かけまわりました　たたく
ころがって　ころびました　つまずいて　にげました
なげつけられました　立て(ば)　とびつきました　ひっかかって
とびだしました



とばされて　まいおりて
てつだいました　まちました　みあわせて
ならべました　そろって　わかれて　ならんで
はなす　かさねました　いただきました　はなれて
もらいました　くださいました
おやすみ　ねて　ねころんで　ねむった
ねかせました
ございます
三
ふるい　ねむく　ひくく　うすい
わかい　あたたかい　おかしい　たのしい
うれしい　つよく　つめたい　やさしく
まぶし(そうに)　さむい(さむそうに)　いいにくい　ほしい
ない　よく　ながく
きっと　ちょっと　いよいよ　だんだん

どんどん　どきどき　はじめて　びっくり
そっと　もうすぐ　もうすこし
その　こんな
すると　そのうち
さあ　どうぞ　こんにちは
ありがとう　おめでとう　ごめんください
四
ころころざか　げんべえさん　れいこ　どみこ
ちらちら　ぼちぼち　ぶんぶん　ばたばた
ぼたり　がらん　こんこん　ちょんちょん
ぼこぼこ　がさっ(と)　はっ(と)　ぽん
ぼんぼこぼんのぼん　ころころ　かあかあ　ふわり
ふわふわ　するり　さっさ(と)　ちらっ(と)
ぐらっ(と)　ごっとん　すいすい　ふっくら
にっこり　ほうほけきょ
おや　あら




| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| あ | か | さ | た | な | は |
| い | き | し | ち | に | ひ |
| う | く | す | つ | ぬ | ふ |
| え | け | せ | て | ね | へ |
| お | こ | そ | と | の | ほ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| きゃ | しゃ | ちゃ | にゃ |
| きゅ | しゅ | ちゅ | にゅ |
| きょ | しょ | ちょ | にょ |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ま | や | ら | わ | ん |
| み | い | り | ゐ | |
| む | ゆ | る | う | |
| め | え | れ | ゑ | |
| も | よ | ろ | を | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| が | ざ | だ | ば | ぱ |
| ぎ | じ | ぢ | び | ぴ |
| ぐ | ず | づ | ぶ | ぷ |
| げ | ぜ | で | べ | ぺ |
| ご | ぞ | ど | ぼ | ぽ |

| | | |
|---|---|---|
| ひゃ | みゃ | りゃ |
| ひゅ | みゅ | りゅ |
| ひょ | みょ | りょ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ぎゃ | じゃ | ぢゃ | びゃ |
| ぎゅ | じゅ | ぢゅ | びゅ |
| ぎょ | じょ | ぢょ | びょ |

| |
|---|
| ぴゃ |
| ぴゅ |
| ぴょ |

青 (4)　足 (16)　高 (25)　早 (32)　九 (36)　水 (59)　字 (64)　友 (79)

赤 (5)　本 (18)　糸 (26)　声 (32)　学 (40)　風 (62)　年 (66)

空 (7)　十 (19)　方 (27)　男 (33)　校 (40)　春 (62)　北 (70)

音 (9)　正 (20)　夕 (29)　外 (33)　入 (53)　花 (63)　国 (70)

火 (10)　色 (23)　立 (30)　八 (35)　道 (54)　先 (64)　女 (72)

冬 (13)　口 (24)　前 (31)　町 (35)　石 (58)　生 (64)　南 (78)





本書の中、特に執筆を依頼したものは、次の通りである。

たと　栗原一登

たのしいよるの中の「ところざか」　矢沢邦彦

さよなら一年生　栗原一登

さし絵

楢原健三　三井正登

浜野正義　三輪孝

そうてい

株式会社　光村原色版印刷所図案部

しんこくご一ねん下

小国110　日あたり

昭和二十五年一月六日　印刷
昭和二十五年一月十日　発行

定価　四十一円

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE JAN. 6, 1950)

著作者　垣内松三　八木橋雄次郎

発行者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地　光村図書出版株式会社　代表者　大江恒吉

印刷者　東京都中央区銀座西六丁目二番地　株式会社細川活版所　代表者　北川武之輔

発行所　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地　光村図書出版株式会社

# 1

下

広島大学図書
0130449799

書出版株式会社

¥41.00